

ブンデスリーガ・中国超級リーグとの比較を踏まえた日本卓球リーグに関する研究

トップスポーツマネジメントコース

5007A333-8 松下浩二

研究指導教員： 平田竹男教授

日本卓球界は近年、低迷を続けている。1979年に小野誠治選手が世界チャンピオンになって以来、日本から世界チャンピオンが出ていない。1979年という年は、ちょうど日本実業団リーグが発足して間もない時で、不運にも日本実業団リーグが発足してから世界チャンピオンが輩出されていないことになる。日本実業団リーグが発足されてから世界のトップから落ちて行き、1985年を境にメダルさえも取れなくなり、1991年には、13位というところまで落ち込んだ。

その後、1997年にダブルスで、個人種目として14年振りに銅メダルを獲得して、2000年にチーム戦で銅メダルを実に15年ぶりに獲得をした。しかし、2000年で銅メダルを獲得した主力選手の筆者と田崎選手は、ブンデスリーガに在籍をしていて、偉閑選手は、中国からの帰化選手で、1987年世界選手権、1988年ソウル五輪のダブルスで金メダルを獲得している中国で育った選手である。日本実業団リーグで強化をされた選手ではなかった。

現在、日本のトップで活躍をしている水谷選手、岸川選手、高木和選手はブンデスリーガで所属をしている選手である。中国からの帰化選手以外で、日本実業団リーグに在籍をしていて世界のトップで活躍をしている選手はいない。

このようなことから日本実業団リーグを変えなければ、日本実業団リーグに所属をしている選手は、ますます世界のトップから離されてしまうという思いから、この研究をすることになった。

本稿では、筆者が、ドイツ、中国、フランス、スウェーデンと9シーズン在籍してきた経験をもとに、日本実業団リーグから世界のトップ選手が輩出できるようなリーグ創りを検証、考察を行った。

第1章では、まずトリプルミッションの概念を用いて日本卓球界の現状を把握し、「普及」や「市場」という面では、競技者数の増加とそれに伴う市場の拡大が起こり、比較的順調に推移しているものの、「勝利」については、Jr.チームの強さが、そのままトップチームの強さにつながっていないという悪循環が生じていることを明らかにした。さらに、日本卓球界のトップリーグである「日本実業団リーグ」が、日本のJr.の選手にとって、世界を目指せる環境を持ち合わせていないため、このように悪循環が生じているのではないかと問題意識を持ち、今後の日本の卓球の競技力向

上のために取るべき、日本実業団リーグのリーグ設計を明らかにすることを目的とし、研究を進めることとした。

第2章では、世界一、二のリーグと称されているドイツブンデスリーガと中国超級リーグと日本実業団リーグについて、筆者の経験を踏まえて比較、検証するという手法を用いるという記述を行う。特に、「選手環境」や「試合環境」といった選手の視点から、上記の3つのリーグの比較・検証を行った。

3リーグ比較項目			
	歴史と概要	選手環境	試合環境
項目1	歴史	練習時間	試合方法
項目2		指導者	試合の賞
項目3		練習設備	観客数
項目4		待遇・契約	メディアの取上げ方
項目5		ステイタス	他リーグとの掛け持ち

第3章では日本実業団リーグについて、第4章ではドイツブンデスリーガについて、第5章では中国超級リーグについての「歴史」、「選手環境」、「試合環境」の大きく3つの視点から調査した。その結果、日本実業団リーグと他の2リーグとでは、選手を取り巻く環境が大きく違い、現状では世界のトップの選手を育てていくことが厳しい現状を明らかにした。

第6章では、ブンデスリーガ、超級リーグ、日本実業団リーグの3つのリーグを調査した結果をもとに、その3リーグについての比較を行った。その上で、日本実業団リーグから世界のトップ選手を育てていくための日本の卓球リーグにとっての最良のリーグ方式を考察し、クラブチームからなるリーグの必要性やフルタイムで練習ができる環境等の施策を提案した。

以上の考察から、現在の日本実業団リーグから世界のトップ選手を育てていくには無理な環境にあるが、練習環境、試合環境を変えていけば、世界一の選手を育成できる素質を持っていると確認をすることができた。

本研究が日本実業団リーグの改革に寄与することができれば、これほど嬉しいことはない。